

2020 年 6 月 4 日

「第 3 回 再生医療に関する社会意識調査」

移植医療・闘病エピソードの想起で、細胞提供(ドナー)への協力意識が 30%の大幅増加
～提供促進のためには再生医療に関連するストーリー発信がカギ～

株式会社NTTデータ経営研究所

株式会社NTTデータ経営研究所(本社:東京都千代田区、代表取締役社長:川島祐治 以下当社)はNTTコムオンライン・マーケティング・ソリューション株式会社(本社:東京都品川区、代表取締役社長:塚本良江)が提供する「NTT コム リサーチ」登録モニターを対象に、例年と同様に「再生医療への細胞提供に関する社会意識調査」を実施しました。

2013 年の再生医療関連諸法の公布以降、新たに再生医療等製品が薬事承認を取得するなど産業化に向けた動きは加速しています。再生医療は、自らの細胞を治療に用いる自家細胞を用いた治療と、自分以外の方の細胞を治療に用いる他家細胞を用いた治療に大きく分類されます。患者自身の細胞を使う自家細胞製品に比較し、あらかじめ準備可能な他人の細胞を用いた他家細胞製品が産業化の観点からは有利であると言われています。海外では他家細胞製品の研究開発が進んでいる一方で、わが国では他家細胞製品の承認件数は未だ1件にとどまっており、今後の他家細胞製品の実用化が課題となります。他家細胞製品の実現には、原料となるヒト細胞の国内における安定的な供給体制が必須となり、安定的なヒト細胞供給を実現するための細胞提供者(ドナー)をいかに確保するのかについて、下記の論点についての調査を実施しました。

- ✓ 再生医療や細胞の提供に関する個人の意識はどうか(細胞を提供したいと思うかどうか)
- ✓ 細胞提供の意識が高い個人はどのような特徴をもっているのか(細胞の提供に協力的なのはどのような層か)
- ✓ 個人が細胞を提供する上での条件および細胞の提供を促進していくための課題は何か

本調査では、再生医療を用いた治療に60%程度の回答者が自身の細胞を提供しても良いと答え、例年と同程度の好意的な回答が得られました。今回の調査では、細胞提供に好意的な層の特徴について詳細を分析した結果、移植医療について思い当たるエピソードがある層、再生医療の用語への知識が深い層では、より細胞提供に協力的であることが新たに判明しました。エピソードとしては、小説やドラマでも細胞提供の協力度と相関があり、有名人の闘病、治療費の寄付、ボランティアではさらに強い相関が見られました。最近、有名人に関するニュースを契機として骨髄バンク登録が急激に増える現象や、COVID-19 拡大防止のための自粛意識が急速に高まる事象が見られており、本調査でも類似の意識付けが示唆されました。

また、細胞の提供に消極的となる大きな理由として、「個人情報の漏洩に対する不安」があることが確認され、個人情報に対する不安を払拭することが、細胞の提供を促進するために重要であることが分かりました。

細胞提供の協力をさらに促すためには、有名人、寄付、ボランティア、ドラマ、小説による具体的なストーリー発信、および、個人情報の適切な取り扱いを啓発することで、一般市民の再生医療に対する理解と協力を向上させることができることが示唆されました。

国が取り組む再生医療の研究開発の推進に加えて、再生医療とその原料となる細胞提供についての社会的受容性を高める取り組みが必要となり、当社では本調査の結果を踏まえた議論を続けていきます。

【背景と調査の視点】

再生医療においては、2013年に再生医療推進基本法や再生医療安全性確保法などが国会で成立し、また薬事法の改正によって条件付きの早期承認制度などが設けられるなど、再生医療の早期の治療応用に向けた環境整備が進められています。実際に新制度を活用した製品が5製品(うち1製品は遺伝子治療用製品)上市されたほか、治験や臨床研究の実施件数も増加傾向にあります。一方、産業全体への波及効果が期待される他家細胞製品の承認数は1件であり、研究段階のパイプラインを見ても限定的です。このため、現状では他家細胞製品の実用化に取り組む個々の企業が海外から細胞を調達するか個別に協力者を探索している状態で、公的にアクセス可能な産業用細胞バンクや臓器や骨髄ドナーのように協力者をプールし、細胞を安定的に提供する仕組みなどは実現していません。

他家細胞製品については、特に製造段階で安定的にヒト細胞が供給されることが必要ですが、細胞の採取方法や活用方法に対する情報不足から来る不安感、倫理的な取り扱いの難しさ、個人情報保護上の課題、適切な費用構造構築の困難さといった観点において国民の理解が得られにくいと考えられていました。

国立研究開発法人科学技術振興機構(JST)の2013年度戦略的創造研究推進事業(社会技術研究開発センター)プロジェクト調査によると、細胞提供者(ドナー)へのアプローチについて詳細な調査が実施され、リビングドナーへの侵襲的組織採取、通常は廃棄される組織の有効活用、デッドドナーの献体組織の活用について実施機関とその役割の可能性が示されています。この調査結果を受け、研究・産業の両面において公的にアクセス可能な仕組み作りに着目し、実務的な課題について経済産業省や国立研究開発法人日本医療研究開発機構を中心に複数の調査・検討が実施されてきました。

国民の受容性や協力の在り方についても同様に現状を確認しつつ、状況に応じて協力可能性を高めるための方策を検討する必要があり、本調査においては細胞提供者(ドナー)側の受容性について調査しました。

本調査は2016年より当社にて継続実施している「再生医療に関する社会意識調査」¹の第3回です。

【主な調査結果】

1. 例年と同様、再生医療に対して概ね好意的な反応が確認された
 - ・ 再生医療の単語としての認知度は84.0%であり、2017年度の調査の82.1%よりわずかに増加していた。
 - ・ 再生医療治療を選択する可能性は70%程度であり、2017年度の調査と同様の傾向であった。
 - ・ 再生医療を実施するための細胞を提供できる人は全体の60%程度であった。ただし、研究目的で細胞を使用する場合、提供できる人は全体の60%を下回っており、2017年度の調査と比べて減少傾向にあった。
2. 再生医療治療を受けることに対して好意的な層の特徴は、献血経験があること、重病の経験があること、乳歯や抜歯した歯など身体の一部を保管していることであり、その傾向は2017年度の調査と同様であった
 - ・ 複数回献血した経験がある場合、献血した経験が無い回答者に比べ20%程度多くの回答者が再生医療治療を受けたいという回答が得られ、2017年度の調査と同様の傾向であった。
 - ・ 自分や家族が重病にかかった経験がある場合、無い場合に比べて20%程度多くの回答者が再生医療治療を受けたいという回答が得られ、2017年度の調査と同様の傾向であった。
 - ・ 身体の一部を保管している場合、保管していない場合に比べて20%程度多くの回答者が再生医療治療を受けたいという回答が得られ、2017年度の調査と同様の傾向であった。
3. 再生医療実施のための細胞提供に対して協力的な層の特徴として、移植医療に関連するエピソードがある、再生医療の用語知識がある、ということが新たに明らかになった。また、これらの特徴は、献血経験、重病の経験、身体の一部の保管と比べ、細胞提供の協力度に強い親和性を示すことが示唆された

¹ 初年度のアンケート調査の設計にあたっては江上美芽(東京女子医科大学/国立研究開発法人 新エネルギー・産業技術総合開発機構)および中村洋(慶應義塾大学大学院経営管理研究科)の両氏にご監修頂いた。

- ・ 細胞を提供してもよい理由として、治療目的では「病気で困っている人を助けたい」という回答が最も多く、研究目的では「日本の再生医療に期待している」という回答が最も多かった。
 - ・ 移植医療のエピソードが思い当たる場合、思い当たらない場合に比べて 30%多くの回答者が細胞を提供可能という回答が得られた。自身にとって具体性の強いエピソードであるほど、細胞提供に協力的であった。
 - ・ 「再生医療」の用語への知識が深い場合、知識が浅い場合に比べて 30%多くの回答者が細胞を提供可能という回答が得られた。細胞提供が治療目的の場合も、研究目的の場合も傾向は変わらなかった。
 - ・ 複数回の献血経験がある場合、献血経験が無い場合に比べて 20%程度多くの回答者が治療目的で細胞を提供可能という回答が得られた。研究目的の場合、30%程度多くの回答者が提供に協力的であった。
 - ・ 重病にかかった経験がある場合、重病にかかった経験が無い場合に比べて 20%程度多くの回答者が細胞を提供可能という回答が得られた。治療目的の場合も、研究目的の場合も傾向は変わらなかった。
 - ・ 身体の一部を保管している場合、全く保管していない場合に比べて 10%程度多くの回答者が細胞を提供可能という回答が得られた。治療目的の場合も、研究目的の場合も傾向は変わらなかった。
 - ・ 移植医療に関するエピソードおよび再生医療に関する用語への知識は、献血の経験、重病の経験、身体の一部の保管と比べ、細胞提供の協力度に強い親和性を示す可能性が示唆された。
4. 細胞提供に協力できない大きな理由として、「個人情報の漏洩が不安」があることが確認された。また、「提供時の訪問の煩わしさ」、「侵襲性」、「提供した細胞の他人利用」が意思決定に影響を及ぼすことが改めて確認された
- ・ 細胞を提供したくない理由として、治療目的では「積極的に提供する理由やメリットが無いから」という回答が最も多く、研究目的では「個人情報が漏洩してしまわないか不安に感じるから」という回答が最も多かった。
 - ・ 細胞を提供する際の条件として、1) わざわざ医療機関などを訪問する必要があること、2) 細胞を採取する際に侵襲性を伴うこと、3) 採取した細胞が全て他人が使用してしまうことがどの程度細胞提供の意思決定に影響を及ぼすのか尋ねたところ、採取にあたって 1) わざわざ訪問をする必要があることが最も影響を及ぼすという回答が得られ、2017 年度の調査と同様の傾向であった。

【本件に関するお問い合わせ先】

■ 報道関係のお問い合わせ先 株式会社NTTデータ経営研究所 コーポレート統括本部 業務基盤部 広報担当 Tel: 03-5213-4016(代) E-mail : webmaster@nttdata-strategy.com	■ 内容に関するお問い合わせ先 株式会社NTTデータ経営研究所 情報未来イノベーション本部 先端技術戦略ユニット 櫻木 誠／江木 淳／沼崎 拓海 Tel: 03-5213-4171(代)
---	---

「再生医療に関する社会意識調査」調査結果

目次

内容

調査概要	5
調査結果	6
1. 再生医療に関する認識	6
1.1 再生医療に関する用語の認知度	6
1.2 再生医療の治療を自身が受けることの選択度	7
1.3 再生医療を実施するための細胞提供（ドナー）への協力	8
2. 再生医療治療に好意的な回答者の背景	9
2.1 献血の経験と再生医療治療を自身が受けることの選択との関係性	9
2.2 自分や家族が重病を得た経験と再生医療治療を自身が受けることの選択との関係性	10
2.3 身体の一部の保管と再生医療治療を自身が受けることの選択との関係性	11
3. 再生医療の実施のための細胞提供（ドナー）に協力的な回答者の背景	12
3.1 細胞提供する理由	12
3.2 移植医療に関するエピソードと細胞提供（ドナー）への協力度との関係性	13
3.3 再生医療に関する用語知識の程度と細胞提供（ドナー）への協力度との関係性	14
3.4 献血の経験と細胞提供（ドナー）への協力度の関係性	15
3.5 自分や家族が重病を得た経験と細胞提供（ドナー）への協力度との関係性	16
3.6 身体の一部の保管と細胞提供（ドナー）への協力度との関係性	17
3.7 細胞提供（ドナー）に協力的である要因の考察	18
4. 細胞提供（ドナー）の条件	20
4.1 細胞提供（ドナー）しない理由	20
4.2 細胞提供（ドナー）に協力する条件	21

調査概要

- (1) 調査対象：20 代以上の登録者
- (2) 調査方法：非公開型インターネットアンケート
- (3) 調査期間：2020 年 3 月 6 日～3 月 8 日
- (4) 有効回答者数：1076 人
- (5) 回答者の年代

【年代 1】 20～29 歳

【年代 2】 30～39 歳

【年代 3】 40～49 歳

【年代 4】 50～59 歳

【年代 5】 60～79 歳

【調査結果の見方】

本調査においては各年代につき同数のサンプルを収集しており、実際の人口比率と異なる集団となっている。そのため、得られた回答内容に対して、2015 年国勢調査における人口比率に照らし合わせたウェイトバック集計をかけ、分析を実施している。なお、特に断りの無い限り全ての調査結果についてウェイトバック集計を行っている。

【補足】

- (*1) NTT コム リサーチ <http://research.nttcoms.com/>

NTT コムオンライン・マーケティング・ソリューション株式会社 (<http://nttcoms.com/>) が提供する、高品質で付加価値の高いインターネットリサーチ・サービスである。自社保有パネルとしては国内最大級のモニター基盤（2020 年 4 月現在約 217 万会員）を保有するとともに、「モニターの品質」「調査票の品質」「アンケートシステムの品質」「回答結果の品質」の 4 つを柱とした「クオリティポリシー」に基づく徹底した品質確保を行い、信頼性の高い調査結果を提供するインターネットリサーチとして、多くの企業・団体に利用されている。

調査結果

1. 再生医療に関する認識

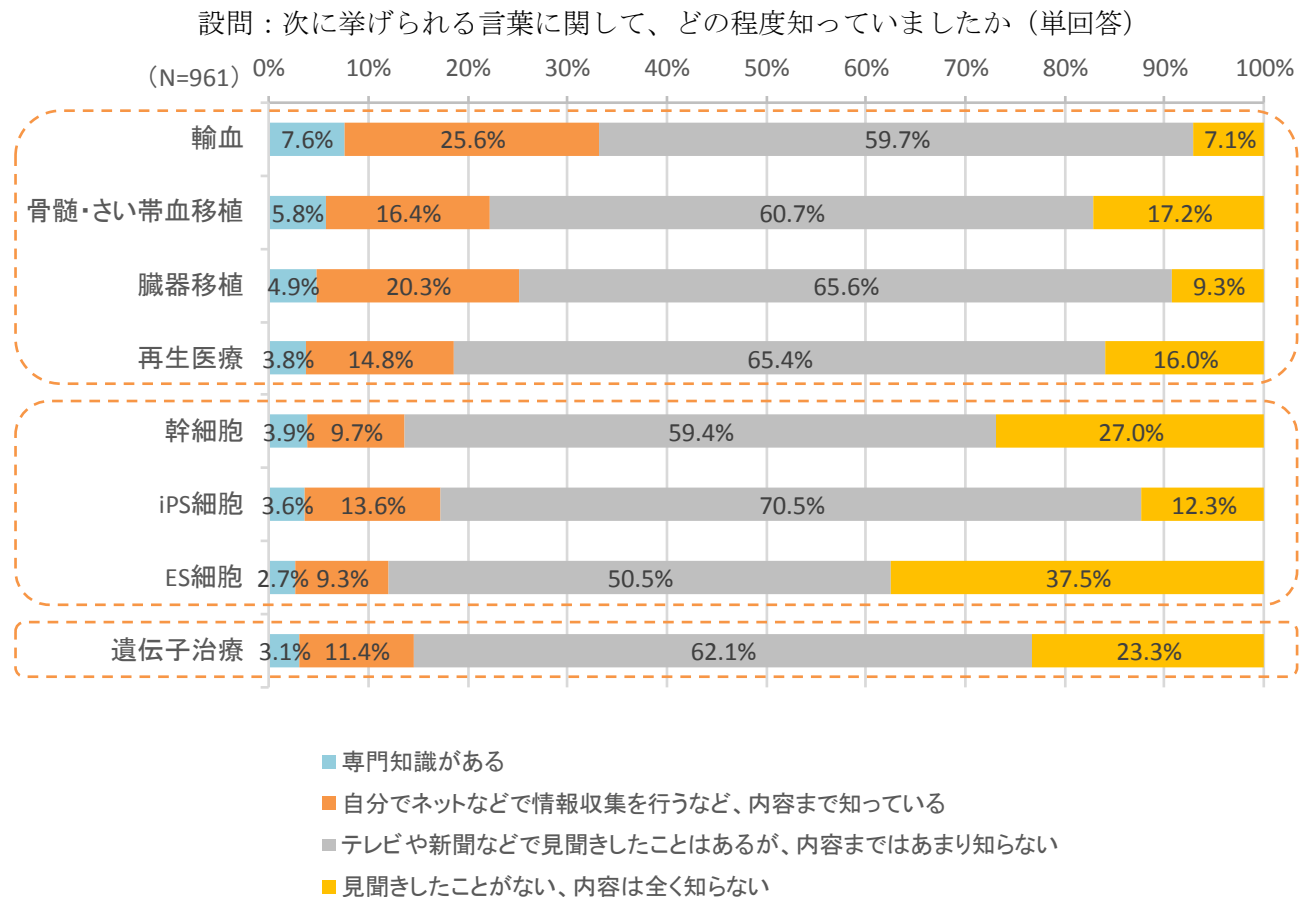
1.1 再生医療に関する用語の認知度

再生医療に関する用語の認知度を下図に示す。

再生医療については、2012 年の京都大学の山中伸弥教授のノーベル医学・生理学賞の受賞より、日本では再生医療の研究および実用化が期待されていることもあり、これまで多くのメディアで活発に報じられてきた。

「再生医療」について「専門知識がある」、「自分でネットなどで情報収集を行うなど、内容まで知っている」、「テレビや新聞などで見聞きしたことはあるが、内容までは知らない」をあわせると 84.0% が少なくとも「再生医療」について聞いたことがあると回答しており、2017 年度調査の 82.1% からわずかながら増加していた。再生医療と移植関連の用語の中では、「輸血」や「臓器移植」の認知度は 90% を超えており、「再生医療」の認知度より高かった。

また受賞の決め手となった「iPS 細胞」では 87.7% が少なくとも聞いたことがあると回答しており、細胞関連の用語の中では認知度が最も高かった。



1.2 再生医療の治療を自身が受けることの選択度

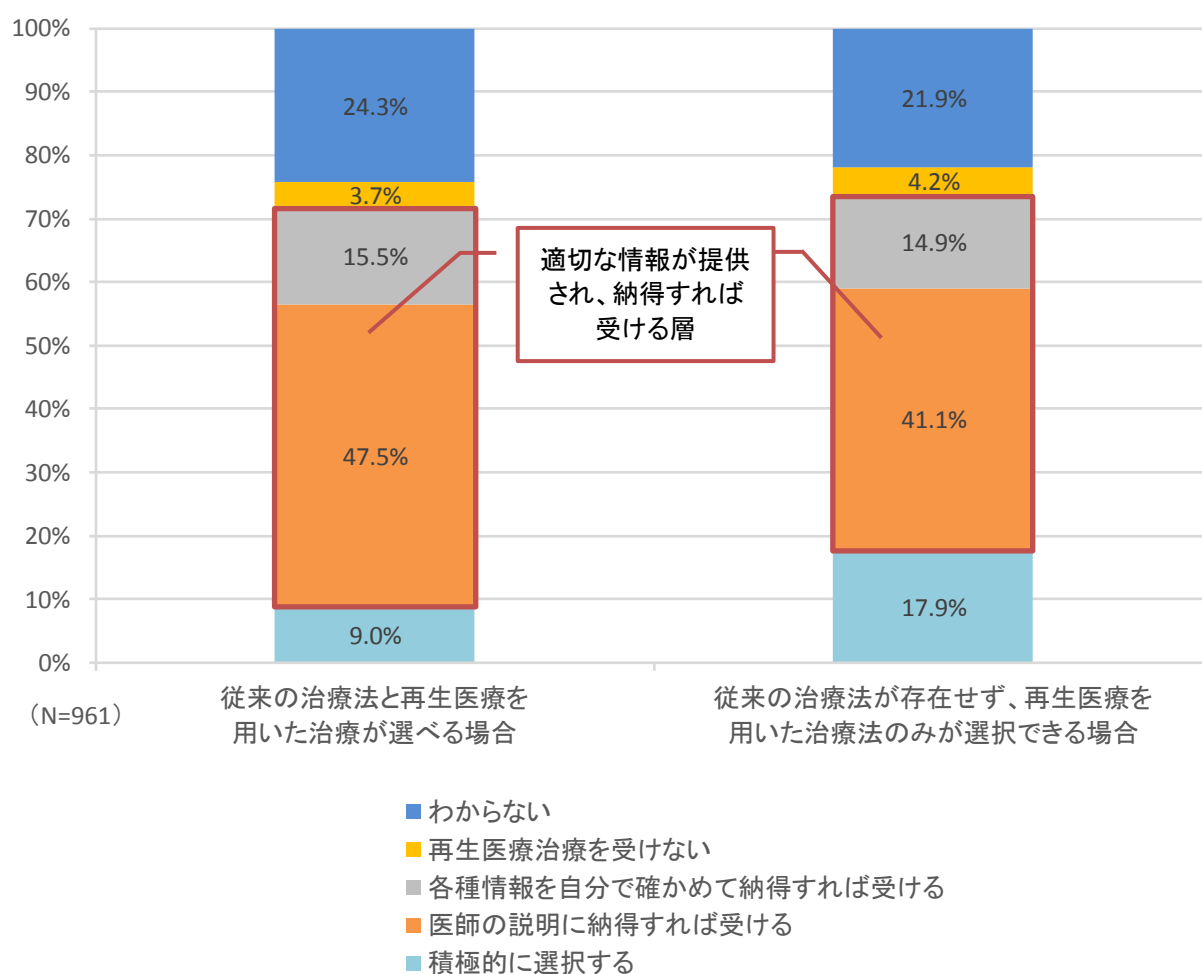
次いで、自身が患者になった時、再生医療を自身が治療として選択するかどうかについて尋ねた。医薬品や医療機器などの従来治療法が「ある場合」は 72.0%、従来治療法が「ない場合」は 73.9%が、再生医療を「積極的に選択する」、「医師の説明に納得すれば受ける」、「各種情報を自分で確かめて納得すれば受ける」のいずれかを選択しており、2017 年度調査と同程度の数値であった。

また、従来治療法が「ある場合」と「ない場合」の両方で、「医師の説明に納得すれば受ける」と「各種情報を自分で確かめて納得すれば受ける」を合計すると 50%以上となり、2017 年度調査と大きな変化はなかった。「納得することができる情報が提供される」ことを条件に再生医療を選択する人が増えることから、患者に対する適切な情報提供が重要であると示唆される。

本レポート中では示していないが、再生医療に関する情報をどのような方法で入手しているのかについて尋ねた設問では、「テレビ番組」という回答が 52.2%で最も多かった。次いで、「新聞記事」、「インターネットサイト、SNS」から情報を入手しているという回答が多く得られている。また、「再生医療に関する情報が得られない」という回答も 28.2%存在した。

これらの結果より、病気にかかり治療法の選択を迫られた状態で冷静な判断を下すためにも、普段から再生医療に関する適切な情報提供がなされていること、および情報提供活動の促進（一般向けの情報提供の機会の増加、情報が広く行き渡る仕組み作りなど）が必要だと示唆される。

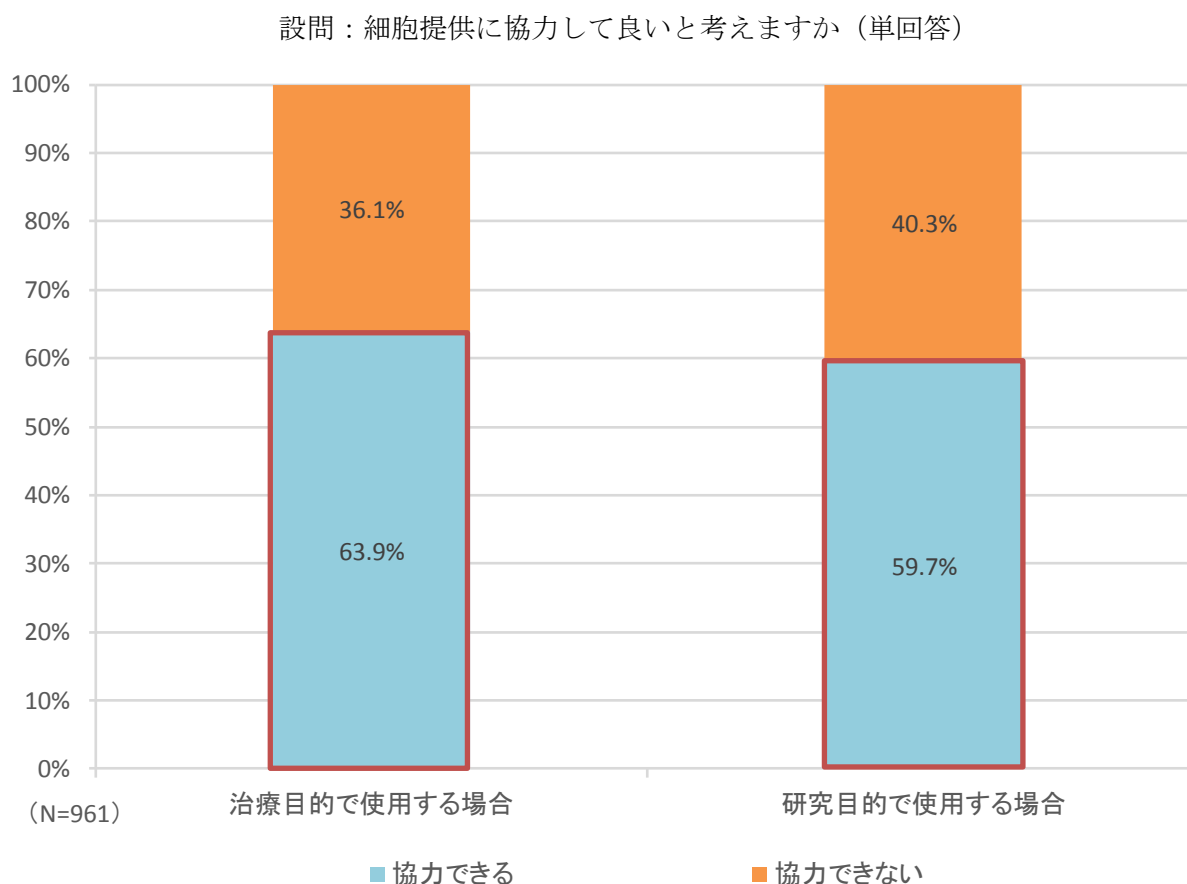
設問：ご自身が患者になったとご想定ください。再生医療を用いた治療法を選択しますか（単回答）



1.3 再生医療を実施するための細胞提供（ドナー）への協力

再生医療を医療として実現するためには、患者に治療として提供される生きた細胞を調達することが大前提である。また、安全で高品質な再生医療を実現するためには、アカデミアや企業でのヒト細胞を使った安全性や有効性に関する研究開発が必須である。以上のように再生医療を実現するためには、生きた細胞を提供するドナー（提供者）の存在が必要不可欠であるものの、ドナー（提供者）を効率的に確保する施策について、現時点で有効な方法は確立されていない。

今回の調査では、「治療目的」、「研究目的」のいずれの場合においても全体の 60%程度が「細胞を提供してもよい」という回答が得られており、細胞を提供可能なドナー候補者は多数存在していることが判明した。経年変化をみると、今回の調査では「治療目的で使用する場合に提供してもよい」という回答が全体の 63.9%であり、2017 年度調査と同程度の数値であった。一方、「研究目的で使用する場合に提供してもよい」という回答が全体の 60%を下回っており、2017 年度調査と比べて減少傾向にあった。近年、細胞に係る研究活動上の不正に関する事例について報道されていたこともあり、提供意思の減少傾向の一因となっている可能性がある。



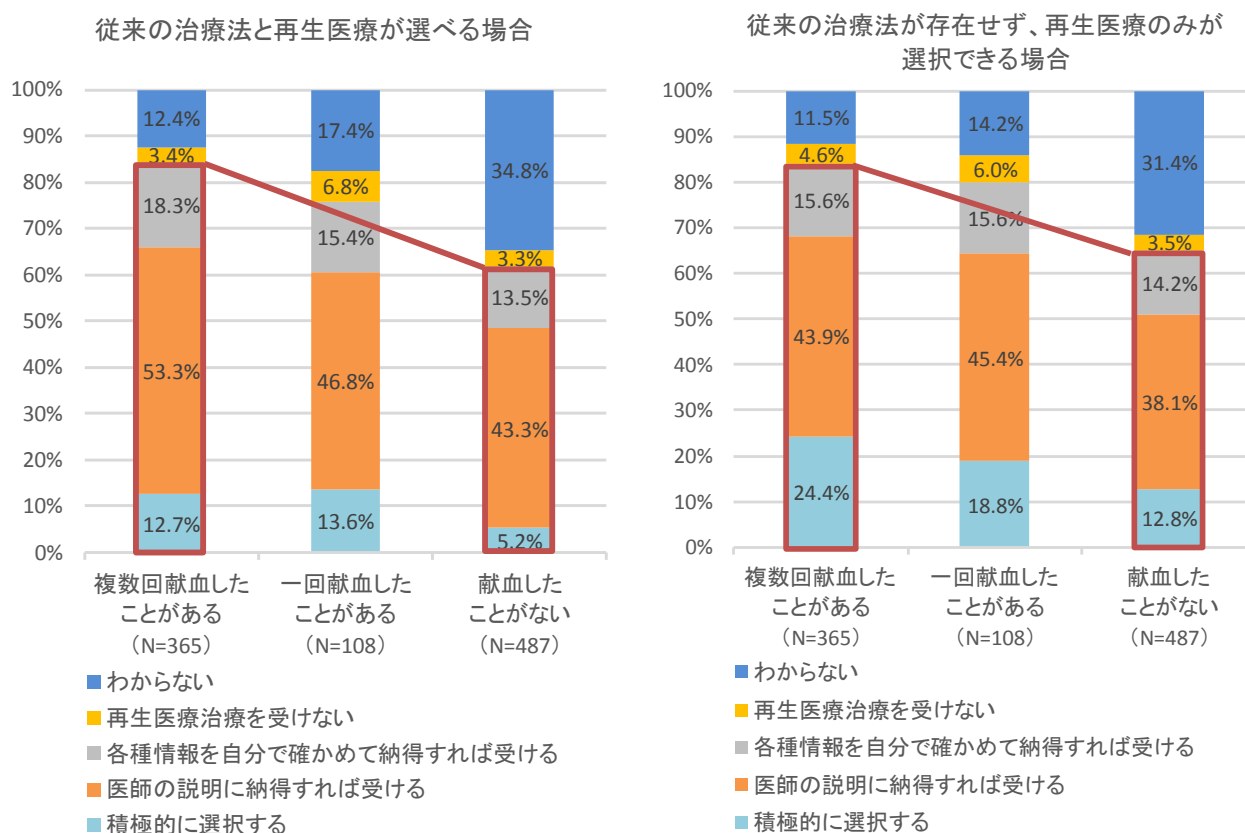
2. 再生医療治療に好意的な回答者の背景

2.1 献血の経験と再生医療治療を自身が受けることの選択との関係性

治療としての再生医療の選択度について、どのような属性が再生医療の選択度に影響を及ぼしているのか調査を行った。その結果、複数回献血した経験がある場合、献血した経験が無い場合に比べて再生医療治療を選択する割合が20%程度高く、2017年度調査と同様の傾向を示した。

献血とは、自らの血液細胞を他人に対して提供する donation (ドナー) 行為であり、献血に対する受容性が高い場合は、再生医療の選択度が高くなる傾向が見られた。2018年には iPS 細胞由来の血小板製剤の臨床研究の実施も発表されており、献血と再生医療との親和性が更に高まることが期待される。

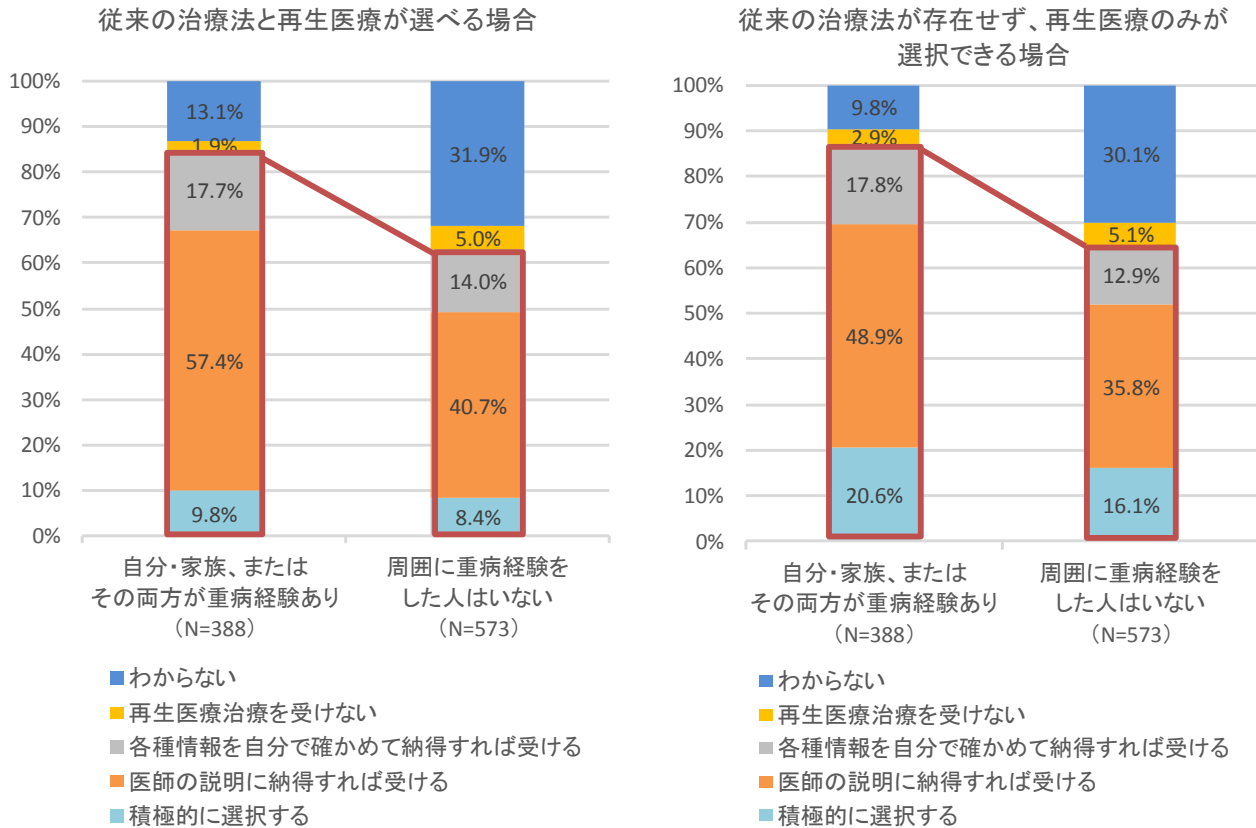
設問：献血の経験と再生医療の選択度との関係（単回答）



2.2 自分や家族が重病を得た経験と再生医療治療を自身が受けることの選択との関係性

同様に、自分や家族、またはその両方が重病にかかった経験がある場合は、重病経験の無い場合に比べて 20% 程度、再生医療治療を選択する割合が高く、2017 年度の調査と同様の傾向を示した。一方で、「わからない」という回答の割合が、重病経験のある場合、重病経験が無い場合に比べて 20%程度低かった。自分や家族が重病を経験することを通じて、再生医療をはじめとした治療を自身で選択することの意識が高まる可能性がある。

設問：重病経験と再生医療の選択度との関係（単回答）

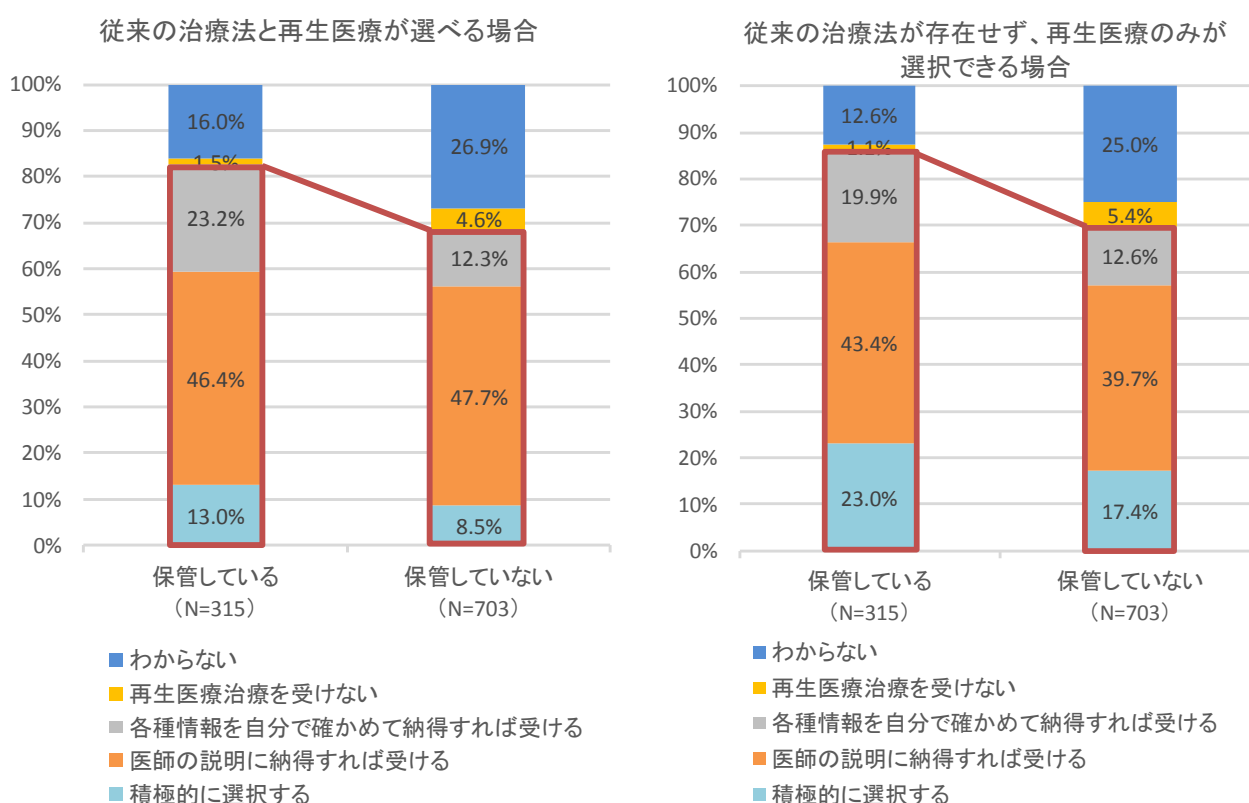


2.3 身体の一部の保管と再生医療治療を自身が受けることの選択との関係性

古くから日本では身体の一部を保管しておく習慣がある。代表的なものとして「乳歯や抜歯した歯」、「へその緒」、「乳幼児期の毛髪」などである。これら身体の一部を保管している場合は、保管していない場合と比べて、再生医療治療を選択する割合が、20%程度高く、2017年度の調査と同様の傾向を示した。

身体から切り離されても身体の一部として大切に扱う考え方が、生きた細胞を用いる再生医療の選択度に影響を与えている可能性がある。

設問：身体の一部保管の有無と再生医療の選択度との関係（複数回答）



3. 再生医療の実施のための細胞提供（ドナー）に協力的な回答者の背景

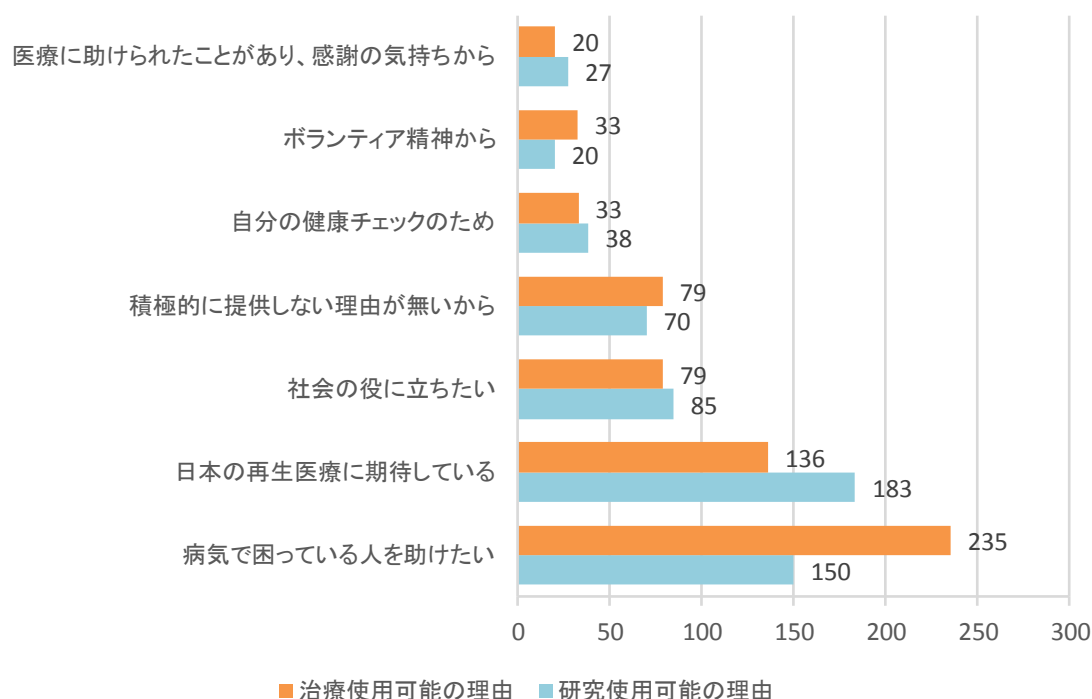
「2. 再生医療治療に好意的な回答者の背景」では治療としての再生医療の選択度と属性（献血経験など）との関係性についての結果を示した。ここでは、再生医療を実現するために必要な細胞提供の意向と属性との関係性についての調査結果を示す。

3.1 細胞提供する理由

「治療目的」、「研究目的」それぞれについて、細胞を提供してもよいとした回答者がなぜ細胞を提供してもよいと回答したのかについて理由を尋ねた。

その結果、「治療目的」の場合、「病気で困っている人を助けたい」という回答が最も多く、「研究目的」の場合、「日本の再生医療に期待している」という回答が最も多かった。

設問：細胞提供をしてもよい理由（単回答）



3.2 移植医療に関するエピソードと細胞提供（ドナー）への協力度との関係性

移植医療の経験・知識を有するかどうかと、細胞提供への協力度との関係性について調査した。

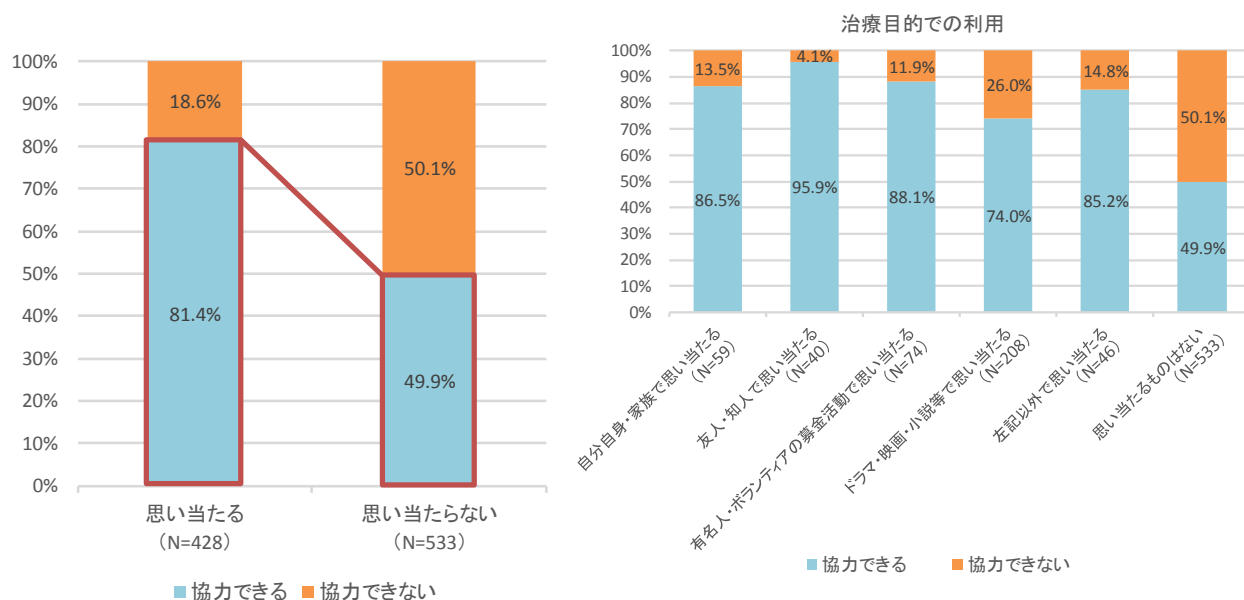
骨髄移植や臓器移植などの移植医療（必要としていたが実施できなかった場合を含む）について、印象に残っている経験・知識などで思い当たることがあるか尋ねた。なお、印象に残っている経験・知識とは、自分自身、家族、知人、有名人、架空人物（ドラマ、映画、小説等）、あるいはそれ以外で思い当たると回答したものを含んだ。

「治療目的」、「研究目的」いずれの場合も、「思い当たる」場合のほうが、「思い当たらない」場合に比べ、協力できると回答する割合が 30%程度高かった。特に、移植医療について「友人・知人で思い当たる」、「自分自身・家族で思い当たる」と回答したものでは協力できると回答する割合が高く、研究目的の場合は 90%を超えていた。

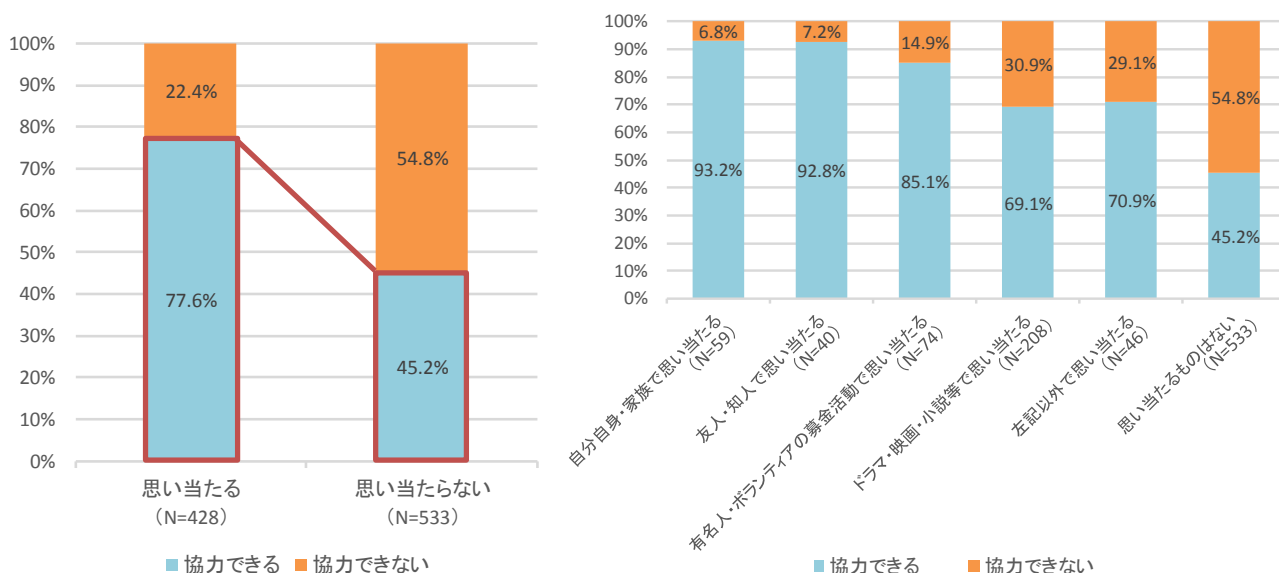
移植医療のエピソードに対する想起と、再生医療への細胞提供に対する受容性には相関があることが示唆される。また、自身にとって具体性の強いエピソードであるほど、細胞提供に協力的な傾向にあることが想定される。

設問：移植医療に関するエピソードの想起と細胞提供の関係（単回答）

治療目的での利用



研究目的での利用

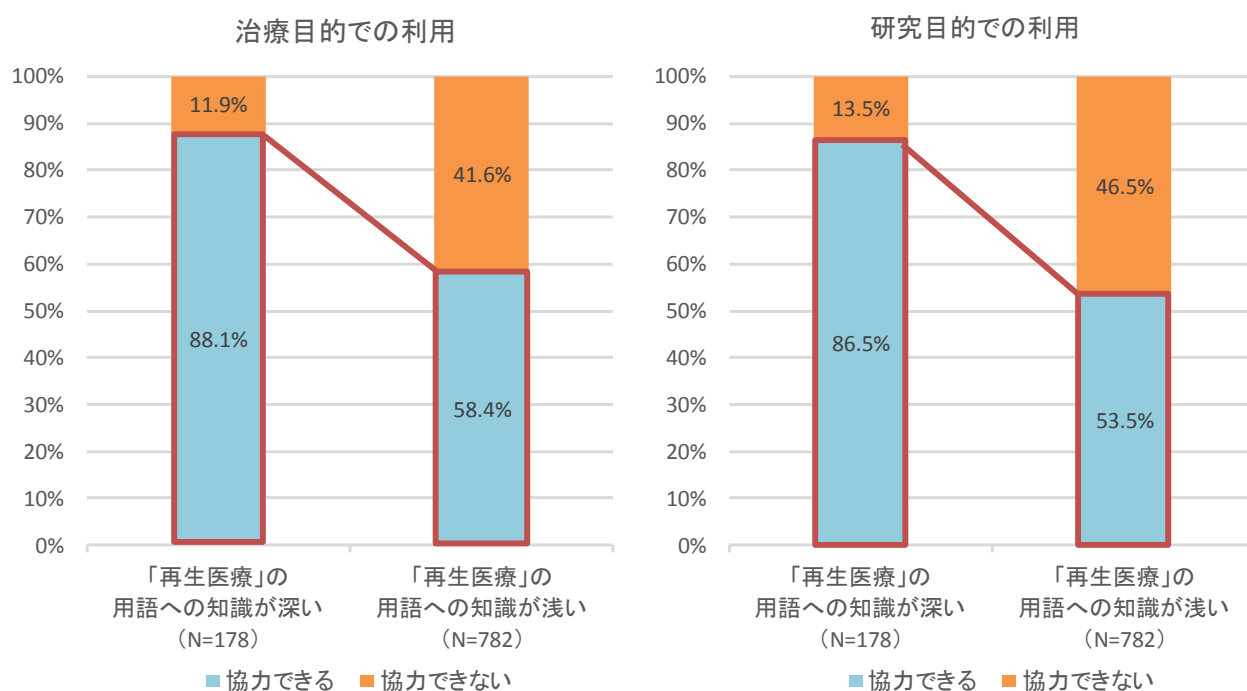


3.3 再生医療に関する用語知識の程度と細胞提供（ドナー）への協力度との関係性

再生医療に関する用語知識の程度と、再生医療を実施するための細胞提供への協力度との関係性について調査した。集計上、「専門知識がある」、「自分でネットなどで情報収集を行うなど、内容まで知っている」と回答したものは「知識が深い」に分類し、「テレビや新聞などで見聞きしたことはあるが、内容まではあまり知らない」、「見聞きしたことがない、内容は全く知らない」と回答したものは「知識が浅い」に分類した。

「治療目的」の場合も、「研究目的」の場合のいずれにおいても、「再生医療」の用語への知識が深い場合のほうが、「再生医療」の用語への知識が浅い場合に比べ、協力できると回答する割合が 30%程度高かった。「再生医療」という用語に知識のある者の方が、細胞提供に協力的な傾向にあることが示唆される。

設問：「再生医療」の用語知識の程度と細胞提供の関係（単回答）



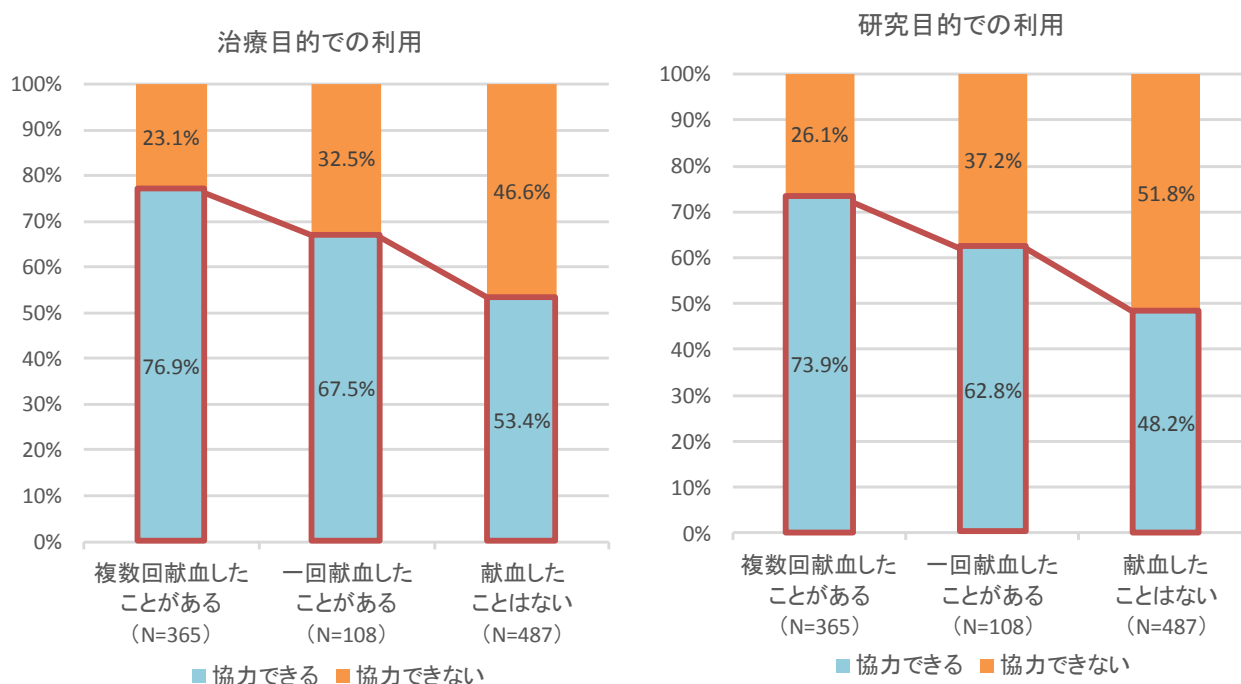
3.4 献血の経験と細胞提供（ドナー）への協力度の関係性

献血経験と再生医療を実施するための細胞提供との関係性について調査した。

「治療目的」、「研究目的」いずれの場合も、献血回数が多くなるほど細胞提供に協力できると回答する割合が増加し、2017 年度の調査と同様の傾向を示した。献血とは、自らの「血液細胞」を提供することであるため、献血に対する受容性と細胞提供に対する受容性には相関があることが想定される。

細胞のドナー（提供者）を効率的に募集するために、献血の複数回経験者を対象としたリクルーティング活動が有効である可能性が示唆された。

設問：献血の経験と細胞提供の関係（単回答）

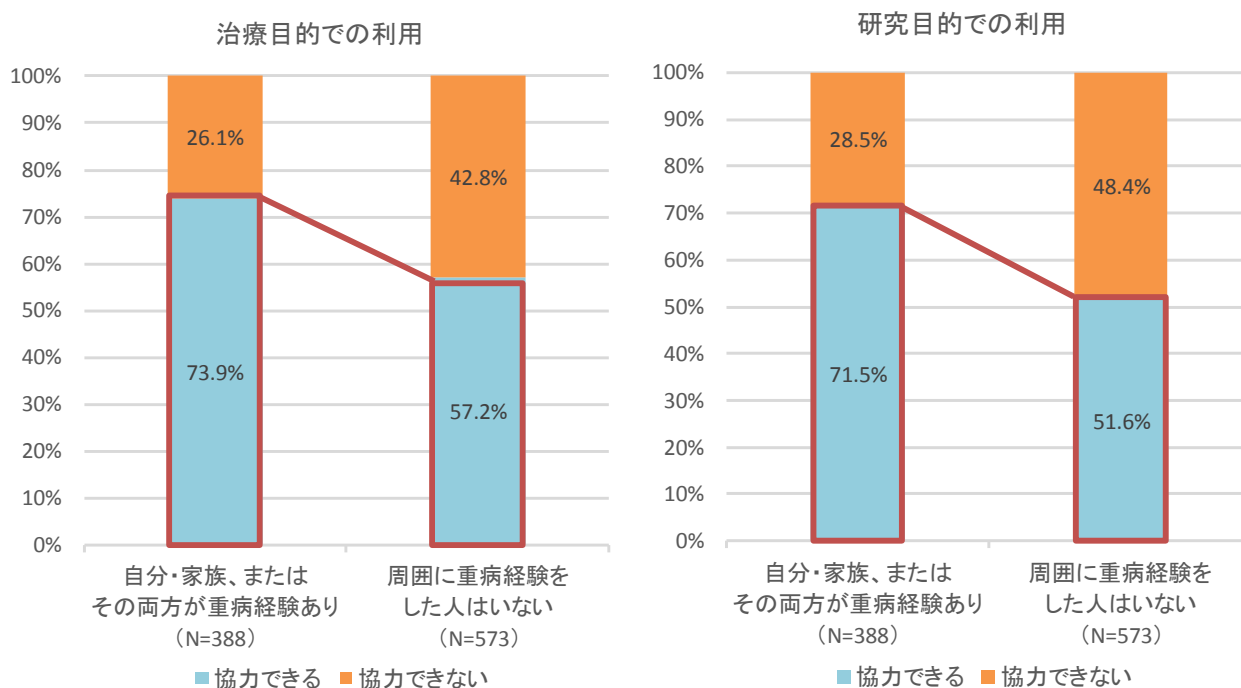


3.5 自分や家族が重病を得た経験と細胞提供（ドナー）への協力度との関係性

自分や家族の重病経験の有無と再生医療を実施するための細胞提供との関係性について調査した。

「治療目的」、「研究目的」いずれの場合も、重病経験がある場合のほうが、細胞提供に協力できると回答する割合が増加することが分かった。この結果は 2017 年度の調査と同様の傾向であった。

設問：重病経験の有無と細胞提供の関係（単回答）

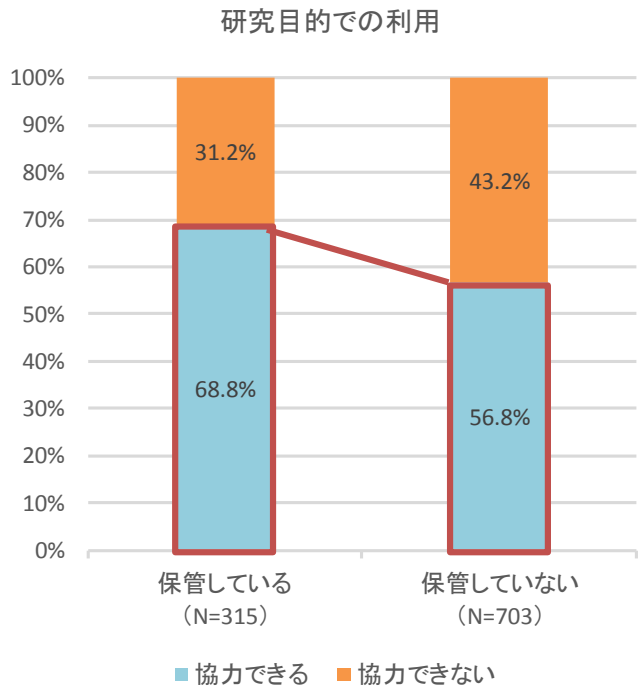
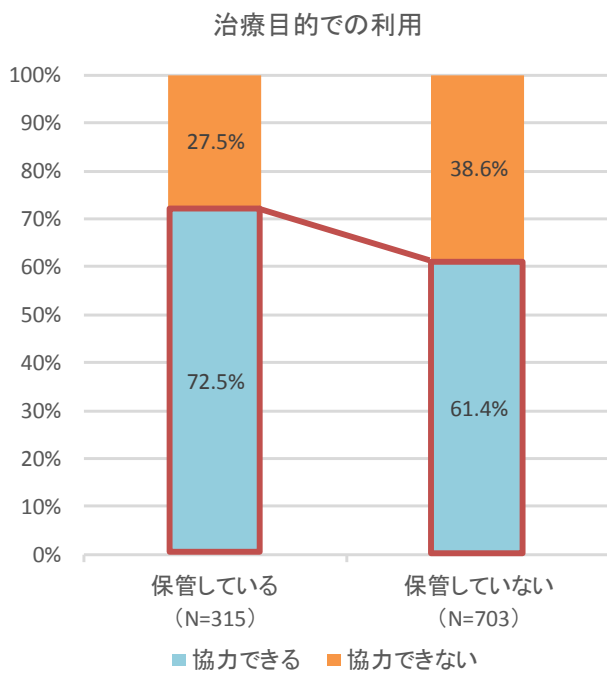


3.6 身体の一部の保管と細胞提供（ドナー）への協力度との関係性

身体の一部の保管の有無と細胞提供への協力度との関係性について調査した。

「治療目的」、「研究目的」いずれの場合も、身体の一部を保管しているほうが、細胞提供に協力できると回答する割合が高いことが分かった。この結果は2017年度の調査と同様の傾向であった。身体の一部としては2.3と同様に、「乳歯や抜歯した歯」、「へその緒」、「乳幼児期の毛髪」を想定した。

設問：身体の一部の保管の有無と細胞提供の関係（複数回答）



3.7 細胞提供（ドナー）に協力的である要因の考察

3.2 から 3.6 を踏まえ、細胞の提供意思に影響する要因および群間差を比較し、以下の表にまとめた。

「治療目的」の場合、提供意思の群間差が最も大きかったのは、移植医療に関するエピソードであり、その差は 31.5%であった。また、「研究目的」の場合は、再生医療に関する用語への知識で最も提供意思の群間差が大きく、その差は 33.0%であった。移植医療に関するエピソード想起および再生医療に関する用語への知識は、献血の経験、重病の経験、身体の一部の保管と比べ、細胞提供の協力度に強い親和性を示す傾向が見られた。

表：細胞の提供意思に影響する要因と群間差の比較

章	細胞の提供意思に影響する 要因の有無	治療目的での提供 意思の群間差	研究目的での提供 意思の群間差
3.2	移植医療に関するエピソード	Δ 31.5%（最大）	Δ 32.4%
3.3	「再生医療」に関する用語への知識	Δ 29.7%	Δ 33.0%（最大）
3.4	献血の経験	Δ 23.5%	Δ 25.7%
3.5	自分や家族が重病を得た経験	Δ 16.7%	Δ 19.9%
3.6	身体の一部の保管	Δ 11.1%	Δ 12.0%

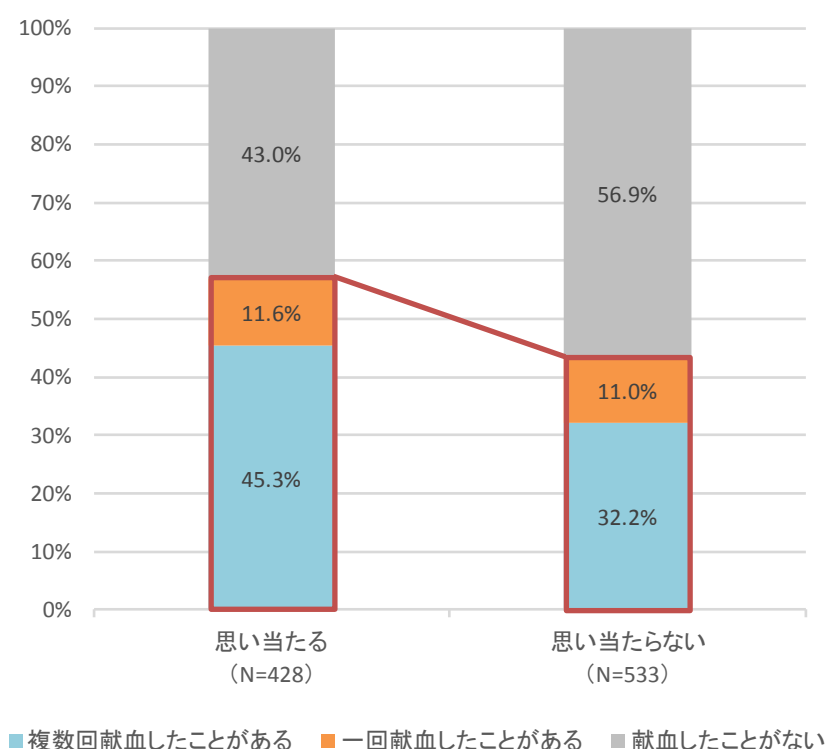
3.2 では、自身にとって具体性の強い移植医療エピソードであるほど、細胞提供に協力的になる傾向が示唆された。エピソードの具体性が高まる事例として、有名人・芸能人が、メディアを通じて移植医療に関するエピソードを公表するケースが挙げられる。そのため、有名人・芸能人による移植医療エピソードの情報発信が活発化されると、移植医療や再生医療が身近なものに感じられ、細胞提供の協力度が高まる可能性がある。

なお、本レポート中では詳細を示していないが、老年層に比べ、若年層では再生医療に関する知識がある層が少なく、かつ、細胞提供に協力的である層が少ない傾向が見られた。若年層向けのドラマ、小説、ボランティア活動などの情報発信によって啓発活動を行うことで、細胞提供に協力的な層が増える余地が高い可能性がある。

移植医療に関するエピソードが思い当たる層と、例年の調査において細胞提供に協力的であった層である献血経験のある層との関係について調査した。

エピソードが「思い当たる」場合のほうが、「思い当たらない」場合に比べ、献血に協力できると回答する割合が 20% 程度高い傾向にあることが分かった。しかし、エピソードの想起と献血経験の相関度は、エピソードの想起と細胞提供意思の相関度(3.2 参照)よりも弱かった。このことから、エピソード想起による細胞提供意思と献血経験による細胞提供意思は、互いに独立度の高い層であることも示唆された。エピソード想起に繋がるストーリー発信と献血経験者への協力依頼の両面から、促進することが細胞提供の促進に有効であることが示唆される。

設問：移植医療に関するエピソードの想起と献血の経験の関係（単回答）



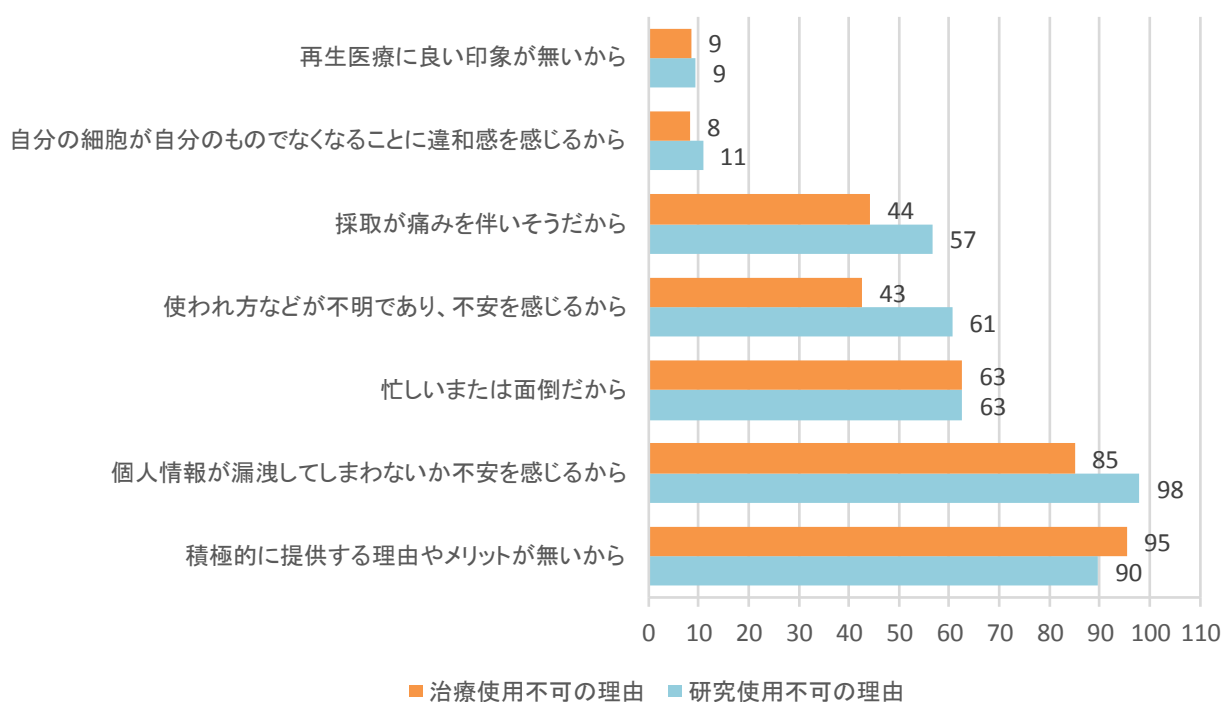
4. 細胞提供（ドナー）の条件

4.1 細胞提供（ドナー）しない理由

「治療目的」、「研究目的」それぞれについて、細胞を提供したくないとした回答者がなぜ細胞を提供したくないと回答したのかについて理由を尋ねた。本年度では、個人情報漏洩への不安が細胞提供の意思に影響を及ぼしている可能性があると思定し、個人情報に関する回答項目を追加した。

その結果、「治療目的」の場合、「積極的に提供する理由やメリットが無いから」という回答が最も多く、「研究目的」の場合、「個人情報漏洩してしまわないか不安を感じるから」という回答が最も多かった。細胞提供を促進するためには、協力者にとっての価値・メリットの向上、および個人情報の漏洩に対する不安の払しょくが必要であると示唆された。

設問：細胞提供をしたくない理由（単回答）



4.2 細胞提供（ドナー）に協力する条件

細胞提供の可否の意思決定に及ぼす影響度について、「細胞提供時の移動の手間（訪問が必要なことの影響）」、「侵襲の度合い（侵襲性の影響）」や「採取細胞の利用範囲（他人が全てを使用してしまうことの影響）」という 3 つの提供条件で、影響度合いを調査した。採取にあたって追加的に訪問する必要があることを重視する回答者が最も多く、50%以上が「おおいに影響がある」、「少し影響がある」を選択した。経年的にみると、いずれの場合も 2017 年度の調査と同様の傾向であった。移動や時間的拘束などの卑近な負担をいかに軽減・緩和するかが、協力のカギであることが示唆される。

設問：細胞提供の条件と意思決定に及ぼす影響（単回答）

